

松平郷と松平家

豊田市の南東に位置する山間の集落「松平郷」は、日本の歴史上最も影響力のある武家の一つである松平家の発祥の地である。神社、寺院、2つの山城跡、そして博物館があり、松平氏の起源を伝えている。松平氏は、地元での地位を確立し、最終的には徳川幕府を設立して日本全体を支配するようになった。

松平氏の系譜

松平郷は、13世紀後半に京都から移ってきた貴族の在原信盛によって開拓されたと言われている。信盛の息子である信重は父の後を継いだ。ある日、信重のもとに徳阿弥（伝 1394 年没）という旅の僧が訪れた。徳阿弥は信重の娘・水姫と恋に落ち、水姫と結婚して在原家の跡取りとなった。徳阿弥は松平親氏と名乗り、松平家の礎を築いた。彼の正確な没年は確認できていない。

親氏は近隣の7つの村を支配下に置き、後継者たちはさらに領地を広げ、南や西の平野部に進出した。1500年代半ばには、三河国（現在の愛知県の東半分）の大部分を支配し、松平郷の南西13キロのところにある岡崎城を本拠地とした。この岡崎城で、松平家第9代当主・松平竹千代（1543-1616）が生まれた。

松平家の領地拡大は強大なライバルたちに止められたものの、竹千代は生き延びて同盟関係を築き、当時の最も強力な武将の一人となった。最終的に徳川家康と名乗り、1600年の関ヶ原の戦いで勝利した後、1603年まで日本を支配する徳川幕府を設立した。

松平の名は、徳川家の中にも受け継がれ、各分家の跡取りだけが「徳川」を名乗り、兄弟は「松平」を名乗った。また、数々の松平分家も存在し、その多くが領地や幕府の要職を与えられた。

現在の松平郷

現在の松平郷は、徳川家康を神格化して祀った松平東照宮を中心としている。松平東照宮は、山の麓にあった、そして3方面から堀で守られた松平家の館の跡地に建つ。20世紀に入ってから、ある松平の分家はこの地に居を構えていた。溪谷の奥の方に入ると親氏の像が道行く人を見守る松平郷園地があり、その先には松平家の菩提寺である高月院がある。

松平郷への道を見下ろす丘は、松平家が万一、村が敵の手に落ちたときに退却するための準備をしていた場所である。松平城と呼ばれていたが、丘の上には比較的シンプルな城郭があったと考えられている。さらに西の谷口に向かって進むと、1500年代に存在した大給城の跡がある。松平城より

「城らしい」城だったことは今でも残っている石垣や城郭から読み取れる。

松平東照宮、高月院、2つの城跡を合わせて、国指定史跡「松平氏遺跡」となっている。